

FUKUCHI

Public
Relations

No.189
September

広報ふくち

伝統を未来へ

2021
9

特集 福智飾り山展

現在、図書館・歴史資料館「ふくちのち」で開催中の特別企画展「福智飾り山展」。メインとして館内に建立された「飾り山笠」は、筑豊唯一の人形師として伝統を継承し続ける富田人形(弁城)の三代目・富田能央さんが手がけたもの。新型コロナの影響によって2年連続で町内の祭事が中止となる中、伝統を未来につなぐために誕生したこの山笠にはどのような思いが込められているのでしょうか。

山笠の題材になった逸話をご紹介します

猛将・加藤清正の虎退治



豊 巨秀吉より朝鮮出兵を命じられた加藤清正。その時、清正の陣営近くに虎が出没し、馬を連れ去られたり、家臣を殺されるということが相次ぎました。度重なる虎の襲撃に清正は激怒し、山狩りを行います。そのうち一匹の虎が茂みから飛び出して来ました。清正は大きな岩の上から、自分の槍で虎の喉元をついて仕留めます。愛用する十文字の槍はこの時片方の刃を折られてしまったという伝承があり、「片鎌槍」と呼ばれるようになりました。



加藤 清正 Kiyomasa Kato

肥後熊本藩初代藩主。幼少より豊臣秀吉に育てられ、猛将と呼ばれるまでに成長。熊本城をはじめとする築城の名手であり、領地統治において手腕を発揮。現代でも「清正公さん」の愛称で親しまれる。

鍋島 直茂 Naoshige Nabeshima

肥前佐賀藩の藩祖。豊臣秀吉の九州征伐を助け、その功により実権を掌握。朝鮮出兵で清正と共に活躍した人物の一人。江戸中期の武士道書「葉隠」の登場人物としてもその名が知られている。



これまで祭りで見られなかった荘厳な山笠が、8月から10月末まで図書館・歴史資料館「ふくちのち」に展示されています。飾り山を制作したのは、町内に作業所を構える富田人形(弁城)。祭事の中止で、伝統芸術に携わる事業者が幕を下ろす中、ついに富田人形が筑豊で唯一となっていました。コロナ禍で伝統の種火が消えていく今、想いを未来につなぐための取組みとして今回の企画が実現したのです。

山笠の題材は有名な逸話として知られる「加藤清正の虎退治」。この山笠には、人形師・富田能央さんの新型コロナ終息への願いが込められています。山笠りで清正と虎が対峙する様子はまさに圧巻。精悍な目つきをした武者人形たちが緊迫の場面を盛り上げます。また、見れば見るほどに目を惹きつける数々の装飾。飾り山だからこそ細部までこだわり抜いたという豪華絢爛な山笠は、見る人を魅了してやみません。

力強さと美しさをまとった
悪疫退散を願う、新時代の山笠――

天井に届くほど縦横に広がる飾り山は幅5m、奥行6m、高さ7mの壮大なスケールを誇ります。清正の家紋である「蛇の目文」が入った旗印を掲げ、意気揚々と戦いに挑む総勢12体の人形と、実物にも劣らない迫力を見せる四頭の虎。他に類を見ない力強さが見る人の心を惹きつけます。



過去と未来を紡ぐ 特別企画 ――― 特集

福智飾り山展

Exhibition of YAMAKASA in Fukuchi town

コロナ禍で町の祭事が二年連続の中止となる中、図書館・歴史資料館「ふくちのち」に圧倒的な存在感を放つ荘厳華麗な飾り山が誕生。そこに込められた思いとは――

伝統と進化
織り出す祭芸術

襖 Fusuma

山笠の隙間に見え隠れするたくさんの襖は、年間で約 600 枚ほど製作されています。美しく描かれた花模様から城内の気品が漂います。手書きで一枚ずつ丁寧に描かれているため、多くの時間がかけられています。



瓔珞 Ornament

形の丸い「菊の瓔珞」と、細長い「玉の瓔珞」があり、揺れるとシャラシャラと音を奏でます。実はステンレス製と紙製があり、低い位置にある瓔珞は、ケガ防止のため紙製を使用しています。間近で見ると違いに気づくかもしれません。

彫刻、絵画、書、建築の要素が詰まった「和」の総合芸術

福智の山笠を彩る 珠玉の 7 選

美は細部に宿る。今回の飾り山ではほぼ全てを新調したという装飾品の中から、その「美」を厳選してご紹介。一つひとつに光る職人技、繊細な装飾に見入るうち、どんどん山笠の世界に引き込まれていきます。

武者人形 Samurai doll

大小合わせ 200 体近くある人形のうち、12 体の人形が登場しています。それぞれの表情や動作は、生きているかのような魅力を引き立てます。

兜 Kabuto

額部分の眉底の色は、昔は黒など暗色でしたが、今はより顔が映えるよう赤色で制作。ガラス玉も雰囲気演出するために、近年取り付けられたものです。富田人形の特徴である目の鋭さが生きています。



着物 Kimono

武者人形がまとう豪華絢爛な着物は、山笠の中でも高価な部分。住職の袈裟にも使われる着物の生地で作られ、真新しい今回の人形の着物には、一体につき約 7m もの生地が使用されています。

Pick up

山笠最上部の鷹の上から戦いを見守る一際きれいな女人形。名前は「女神」と呼ばれ、山笠の守り神でもあると伝えられています。



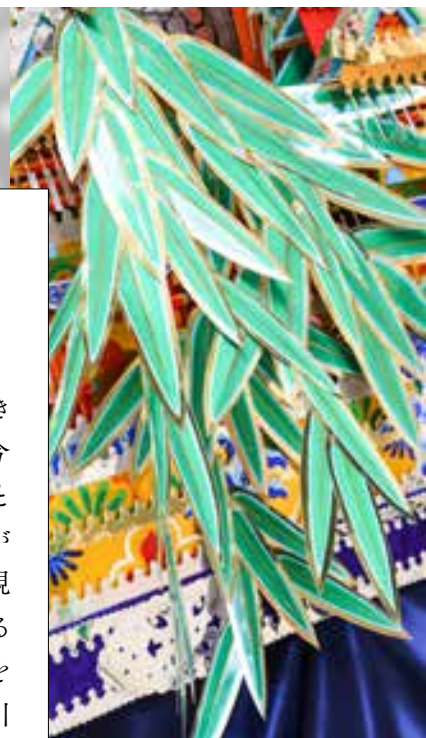
波 Wave

山笠の中央を滑らかに流れる紙波や、勢を感じる両脇の波板。紙波の装飾は難易度が高く、30 年以上の熟練の職人が担当。波板は躍動感を演出するため、現在の山笠で多く使用されています。



笹 Bamboo

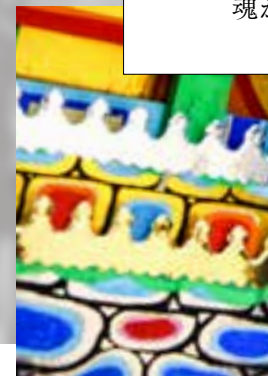
今回の山笠でひときわ目を引く笹は、今まで使用されたことがなく、富田さんが思案して初めて実現したもの。笹が入ることで竹林から姿を現す虎の臨場感を引き立て、全体の印象も優美にしています。



ギザ Giza



その名のとおりギザギザしている部分で、山笠の至るところに見られます。ダメージを受けやすい装飾ですが、見栄えの美しさにこだわり、一つの歪みも許さない職人魂が詰まっています。



据え山道具 Traditional tool

普段の山笠では滅多に見られない、据え山専用道具。山笠を大胆かつ豪華に彩る貴重なパーツです。今回は古くからある据え山を使用。丹塗りの外観にふんだんに飾られた瓔珞が華やかさを演出しています。





← パネル展では、福智町の神幸祭や山笠について詳しく解説しています。祭りや山笠の歴史を知ること、町の伝統への理解もさらに深まります。

03 祭りの歴史 を伝えるパネル展

祭りの歴史を過去の広報紙や資料を用いて紹介しています。町の祭りを詳しくご存知ないかたも、ぜひ参考にご覧ください。

04 祭り本 がずらり 期間限定の特設コーナー

飾り山の展示期間に合わせ、祭りに関する本をご紹介します。この機会に祭りについての知識を増やしてみませんか。特設コーナーは飾り山の前に設置しています。



日本の祭りから世界の祭りまで
本で学ぶ祭りの世界

今回取りそろえた本は全部で42冊。全ての世代のかたに楽しんでいただけるようご用意しました。絵本「えんにち」では祭りが出来るまでの過程をかわいいイラストと共に紹介したり、「祭りと行事図鑑」には福智町の祭りも掲載されています。その他、世界の祭りを紹介した本など、多数取りそろえていますので、ぜひお手に取ってご覧ください。

◀ コーナーを担当した
司書の古賀淳子さん

特集 福智飾り山展

山笠の展示以外にも関連企画が目白押し

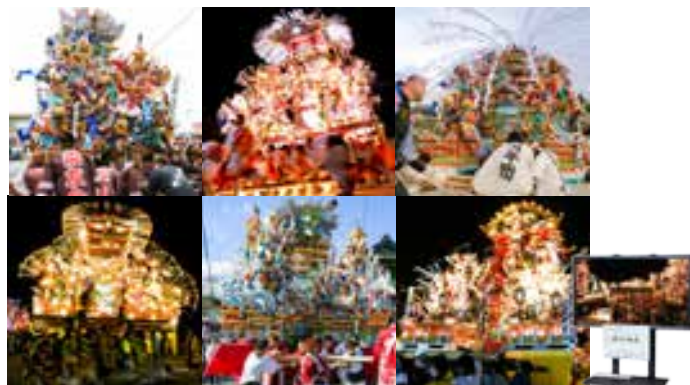
祭りを楽しむ4つの企画

子どもから大人まで見応えのある企画をご用意。
ぜひ一緒にお楽しみください。

01 過去の写真を

一挙に公開するスライドショー

過去の各地区の祭りの写真をスライドショーで上映中。旧町時代の貴重なシーンもあり、見ているだけで懐かしい祭りの様子が伝わってきます。曜日によって上映写真の地区が異なります。下記表をご参照ください。



スピーカーから流れる^{はやし}囃子の音色に気分も盛り上がります。「オーラーヤッサー」のかけ声や^{こゑ}溢れんばかりの活気、様々な思い出がよみがえります。

※ 写真の再生スケジュール

上映日	月	火	水	木	金	土	日
地区	赤池	休館	金田	方城	赤池	金田	方城

02 祭りにまつわるクイズ を出題

9月からの新企画。町の地域活性化に取り組んでいる「FIWC九州」の大学生たちが山笠にまつわるクイズを掲載したリーフレットを作成。ふくちのち館内で配布されるクイズは難問を含んだレベルの高い内容です。ぜひご家族やご友人と一緒に挑戦してみてください。



↑ 人形の制作現場を大学生が訪問

Quiz

例えばこんなクイズが掲載されています。

Q. 山笠作りで接着剤として用いられる「^{にかわ}膠」の原料は何でしょう？
A. 鯨の軟骨。他にもうさぎの皮や骨の骨髄を原料にしたものがあります。

Q. 山笠の人形の中身は何でできているでしょう？
A. 竹と紙。竹で骨組みを作り、その中に紙を詰めて人形の形を作ります。

ちょっと難しいけど面白い、そんなクイズが盛りだくさん。ご期待ください。



飾り山の表札には、虎退治の虎の字に「コロナ」のふりがなが振られています。悪疫退散を願う思いが伝わる、現在の状況ならではの表現です。

想いをつなぐ。伝統を未来に――

色あせない記憶を胸に 動き出す、その先へ

山笠は作り手ではなく受け手が感じるもの。
だからこそ多くの人に見てほしい。
その声が次につながっています。

町の祭りにとつて、神輿を守る役割も果たす山笠は、古くからなくてはならない存在です。「見るだけで胸が高鳴る」と感じるかたも多いはず。祭りの情熱や感動、そこで感じた大切な人との絆は、消えることなく、深く私たちの心に根付いています。今回の飾り山は、富田人形が新型コロナウイルスの終息を願い、町の人たちへの思いと、未来への希望を込めた渾身の大作です。コロナ禍で祭りが開催できない状況が続いていますが、伝統の灯火を絶やさぬよう、町が誇る伝統芸術の素晴らしさをこの機会にご堪能ください。



1 真剣なまなざしで、一つずつ丁寧にタッカーでギザを打つスタッフ。2 天井ぎりぎりの高さで、下から届く指示に従い飾り付ける。3 ぼんかんの準備風景。緊張感ある武者飾りから開放され、時々笑顔がこぼれる場面も。

Special Interview

富田能央さん

Yoshihisa Tomita

1987年弁城生まれ、33歳。富田人形の三代目棟梁。先代の死後、25歳で棟梁となり、地道な努力と苦労で伝統を守り続けてきた。独自の目線で山笠に新風を巻き起こす、期待の若手人形師。

イベントの中止が相次ぎわずかに落込むこともありましたが、「下を向いても仕方がない」とすぐに気持ちを切り替え、古い道具を処分したり、新しい道具を製作するなど、空いた時間をフルに活用しました。当たり前の日常が変化したこと、将来への良い経験だったと捉えています。人形制作会社というのは誰しもができるものでありません。今回の飾り山展は、伝統を継承する責任を今まで以上に感じる機会になりました。この飾り山が一人でも多くの人の目に届き、「来年こそは祭りを開催したい」という熱意につながるものであればうれしいです。